

平成28年12月13日

教員各位

教育改革室長 新田 孝彦

「シラバスコンクール」推薦科目の公表について

本学では、平成12年度から各授業科目のシラバスをホームページに公表するとともに、教育ワークショップなどで授業設計の方法、シラバスの書き方についての内容改善を図ってきました。

平成21年度からは、次年度以降のシラバスの改善に役立てていただくため、高等教育推進機構全学教育部、及び同機構高等教育研究部高等教育研究部門等の協力のもと、「シラバスコンクール」として、当該年度の全学教育科目、学部専門科目及び大学院専門科目のシラバスの中から、参考となるものを選んで公表しております。

シラバスは、部局、課程、授業科目の性質により、きわめて多様であるため、一律に「模範例」を挙げることは困難です。したがって、今回公表したものはあくまでも「参考例」として、良いシラバスとはどのようなものか、今後も部局、課程、授業科目等ごとに、関係教員グループで議論を深め、学生にとって役に立つシラバスの作成をお願いします。

なお、北大のシラバスについては、外部評価や今回のシラバスの選定の過程で、いくつかの改善点が指摘されています。シラバスの作成に当たっては、以下の点にもご留意ください。

- 1) 必須項目(授業の目標, 到達目標, 授業計画, 準備学習(予習・復習)等の内容と分量, 成績評価の基準と方法)をもれなく、できるだけ詳細かつ具体的に記述してください。各項目1行程度の記述では説明不足です。
- 2) 「授業の目標」(一般目標)と「到達目標」(行動目標)を明確に区別し、それぞれ(教員ではなく)学生を主語にして記述してください。

「授業の目標」(一般目標)では、授業で扱う内容の概略を、例えば「〇〇について理解する」の形式で、できるだけ詳細かつ具体的に記述してください。

「到達目標」(行動目標)では、この授業で学生がどのような能力を身につけることが期待されているかを、例えば「〇〇することができる」の形式で、できるだけ詳細かつ具体的に記述してください。

- 3) 「到達目標」(行動目標)と「成績評価の基準と方法」とが、密接に関連づけられている必要があります。すなわち、すべての到達目標が成績評価の対象となるものでなければなりません。到達目標は学習のゴールなので、測定可能な動詞で表現されなければならず、例えば、『理解する』、『学習する』などは不適です。
- 4) 「授業計画」と「準備学習(予習・復習)等の内容と分量」については、2単位の授業科目では、定期試験の期間を除いて、最低でも30時間(15回)の授業時間の確保が必要とされ、また、教室内外の学習を合わせて、標準的に90時間の学習が必要とされていることを念頭において、両項目を密接に関連づけ、できるだけ詳細かつ具体的に記述してください。
- 5) 「成績評価の基準」においては、授業への出席状況を単に点数化し評価に用いることはできません。その意味で、学生が能動的に参加する授業計画を立て、授業への積極的な参加を評価する授業設計が必要です。
- 6) 部局独自の様式のシラバスでも、「授業の目標」(一般目標)と「到達目標」(行動目標)を区別し、「授業計画」と「準備学習(予習・復習)等の内容と分量」を関連づけて記述してください。

■[平成28年度 全学教育科目・学部専門科目・大学院科目 シラバスコンクール推薦科目一覧](#)

参考:

[シラバス検索](#)

[北海道大学FDマニュアル](#)

[平成28年度シラバスコンクール推薦科目一括表示\(PDF\)](#)